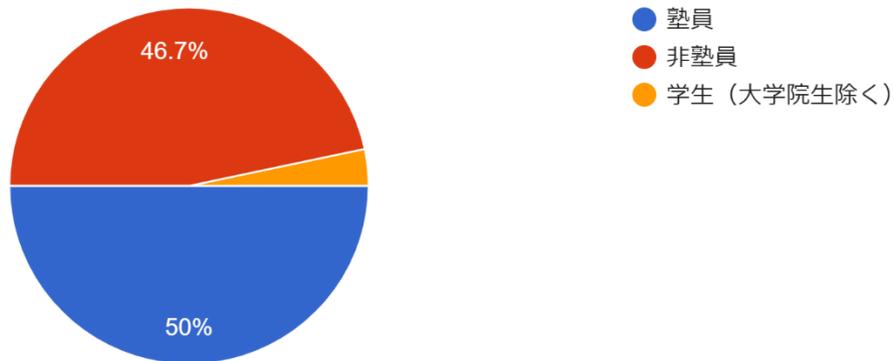


看護未来塾第18回勉強会報告

1. 参加申し込み 60名(塾員30名 非塾員28名 学生2名)



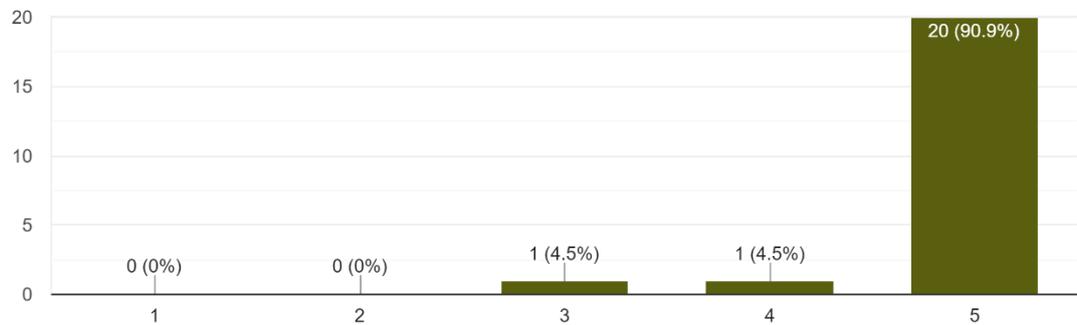
2. 参加人数

- ・話題提供:46名
- ・グループディスカッション:38名
- ・全体討議:41名

3. アンケート集計

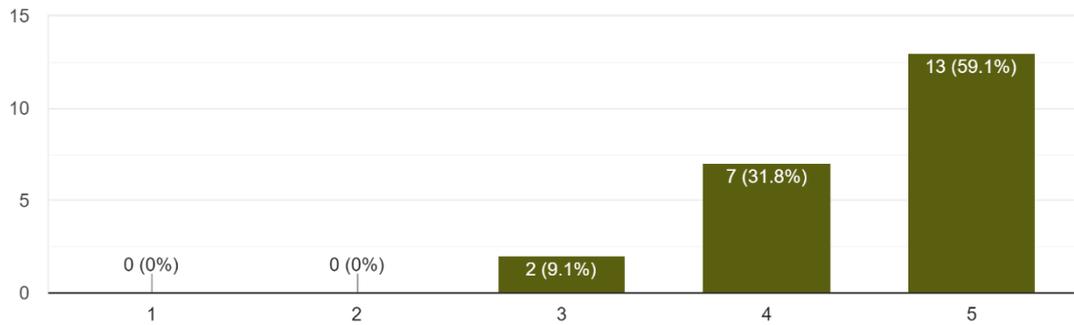
n=22

勉強会にはどのくらい満足されましたか。
22件の回答

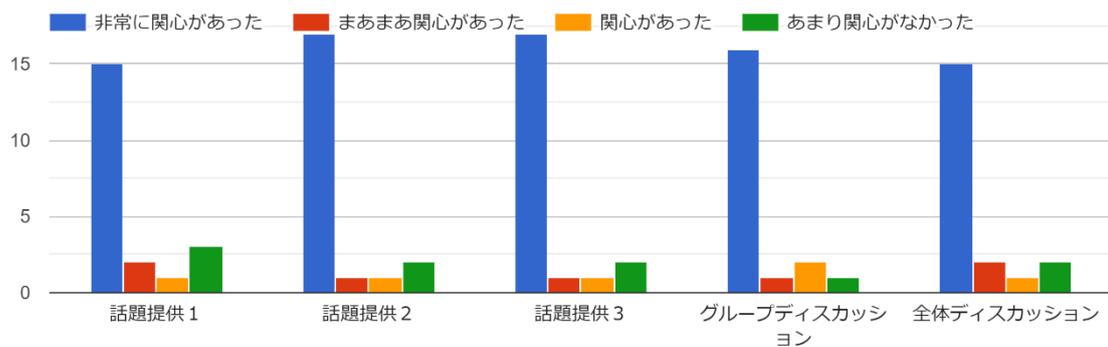


ご自分の仕事との関連性や、仕事に役立つ部分はありましたか。

22件の回答



以下の各セッションは、どのくらい関心がありましたか



Q.この勉強会では、主にどのようなことを習得しましたか。

- リアルな現場の状況、そこで働きナースたちの葛藤、心の痛みが嫌というほど伝わった。人権を尊重した感染防止とケアの価値が確認できるような両立した取り組みが求められる。感染防止とコロナ禍の臨床で看護師が何を考え、どのように看護していたのかが良くわかりました。また、コロナ禍では、看護職が便利に使われたのではないかと感じました。私は基礎教育の現場にいますが、自分の職業的アイデンティティをしっかりと持って、患者さん、社会のために行動し発言できる人材を育成することをもっと考えないと行けないと思いました。
- 看護基礎教育において学生に伝えていくべきこと(伝承含め)、コロナ禍の学生の学びなど
- 看護の質の低下によって逆に看護が守らなければいけないものがハッキリしたのではないかと考えました。患者にどのようなことが起きたのかを注目することで具体的な守るべきケアが見えてくるのではと考えることが出来ました。コマ化するときでも人間がコマ化しているということが大事なのだと考えました。
- 看護管理の考え方、過酷な状況の中でどうやって看護を行うか考えて行く必要性、看護管理について、コロナ禍での看護師の精神面フォロー、コロナ禍での様々な経験から今後のケアに生かすことや、看護管理の視点など可視化する必要性
- コロナ禍で働く看護師たちが責任をもって働いているが、ただ使命感や責任感だけでは成り立たないと思う。クラスター的环境下でどのようにして、向き合うのか業務だけではなく、本

当にこれは必要なのか?と思う俯瞰した目と、協力してくれるスタッフの気持ちを発言できる場所を作ることの重要性を習得した

- コロナ禍の看護師の体験から次のステップをつくる必要がある。
- COVID-19 の影響は、想像以上に看護師等に影響を及ぼしていることに驚きました。駒感、売られる、なし崩し的など、ショックでした。
- 当たり前ですが、今回お話を聞かせて頂いた皆様の話すコロナ病棟や看護は、自分が見てきたものとは異なるのだなと思いました。私は附属病院のコロナ病棟でアルバイトはしているものの、大学生ということもあり実際のところは何も知らなかったのでリアルを聞くことが出来て良かったです。3名の話題提供の方や同じグループの方に関しても、それぞれの立ち位置や視点、経験からの学びを得ることが出来ました。同じコロナとして一括りに「コロナに携わる医療従事者」として見られているものの、病院の余力や様々な要因が関連し、全く異なる環境になっていたことも今回1番衝撃を受けました。ここからは話せなかったものも含めた私の意見になります。話題提供の中の「コマ感」という言葉は、言われて自分の中でもストンと落ちました。看護師さんとはまた異なりますが、私はアルバイト先のコロナ病棟の状況によって、その日に人手の足りない病棟に移動させられた経験があり、毎日異なる病棟で、物品の場所も分からないままに異なる仕事をしていたことがあります。きっと大卒ではその時に私達学生が感じていた気持ちと、そのような看護師さん達感じていた気持ちは変わらないのではないかと思います。ディスカッションの中では患者さんとの関わりに関する苦勞、管理や教育に関する苦勞、病棟とそれ以外に関するそれぞれの苦勞など知ることが出来ました。当たり前だから話に出なかったのかもしれませんが、最初の頃の物品の不足や周囲からの目も辛かったことの1つだったなと私は思います。ガウンがなくレインコートを着ていたり、N95が足りないから3日使用してほしいと言われてたり、学生のためコロナの患者さんと関わることはなかったですが、その分、バイオハザードマークのゴミを捨てる時や汚物室のシンク掃除のPPEだったり不十分な時期がありました。また、私の家族がコロナに感染した時に私が持ってきたんじゃないかと疑われたことがあり、そういう目で見られることもあるのだと衝撃を受けました。友人たちはコロナと一緒に大学に入学したので、何か思われる等は特になかったのですが…。来年看護師として働き始めるこの学年ですが、私が居る大学では1学年100人程度の学部でも未だに顔の分からない学生が多くなります。また昨年度まで居た先輩との交流は殆ど無いに近く、部活なども制限されるなど、先輩後輩との交流の方法を忘れてしまっている学生も居ると思います。技術や経験に関しても不足を感じます。別の大学の友人は、2020年(大学1年)は全てオンラインだったため、ベッドメイキングの演習がオンライン視聴だけで終わってしまったと話していました。その様々な経験のなさが働き始めてからどう苦勞に繋がるのかも正直なところあまり分かっていません。そのため、まとめとして南先生が話して下さった「学生はコロナのことを知らない」にとても納得しました。大学生活としてのコロナは知っていても、看護師へのコロナの影響は私も知らなかったです。自身が将来経験する問題でもあるので、このようなお話は学生のうちに知りたいと思います。今回私は知ることが出来てとても良かったです。ありがとうございました。
- コロナ禍で何人がなくなったかなどのデータは、表のデータとして出るけれども、看護師が患者等に受けた身体的暴力、言語的暴力などは出てこない、また、銃規制が騒がれる中で、コロナ中に銃の所持の増加、銃による殺人の増加などが多くなったことが示されていました。日本では、銃の問題はないにしても表には現れない問題が出ています。今回、何があったかを看護師の生の言葉として残し、世に出すということは本当に必要と思いました。
- 看護師がコマ化しているという実感、認識ともに全くなかったので意外な発見をしました、ま

た宮子先生の感染症を言い訳にした患者への扱いについてもある程度仕方ないと思っているところがあり、コロナ患者を受け入れる側としては DNAR の取得は必須でしたし、あの頃はそうしないと患者を受けられなかったという自分への言い訳のようなものを感じました。

- 竹原さんのお話は、概念がわかりやすく伝わってきました。現場の看護師として同じことは平時から感じている、だからこそ非常時よりその感じ方が強くなるのではないかと思いました。組織のありよう、看護師としての職業意識について考えさせられ、今後これらのことを教えている研修生に伝えられたらと思いました。宮子先生のお話は、精神病院でこれまで一生懸命患者の人権を守るために取り組んできたことが、「感染」という名の下無視され、壊されてしまったことを感じました。普段からある社会の歪がこういった緊急時により大きくなることを認識して、平時の看護及び看護教育をしていかななくてはいけないと感じました。
- コロナ禍で看護現場の最前線で何が起こっていたのか、を教えてくださいました。そして今だからこそ、看護職が重要であることを再確認できた(抽象的ですが)時間でした。
- 看護管理が如何なるものなのか知れた気がします
- グループディスカッションでは、訪問看護師が「20分という短時間でケアを提供する経験をした」ことで、何が看護のコアであるかをより明確に認識できたというポジティブな発言があったことは新たな気づきでした。
- 3人の情報提供者の方々への報告は大変有意義でした。日々感じることはたくさんありますが、なかなか、感じたこと、考えたことを発信していくのが看護界の課題と思います。自分の立ち位置で出来ることをやっていきたいと思います。

Q. 本勉強会に関するその他のフィードバック

- いつも、タイムリーな企画ありがとうございます。言いつばなしにならないためにも頭が下がります。もっと現場の方たちが参加できるといいなあともったいないなと思います。看護師たちは多忙でこういう企画にも腰が重いのかな。参加する事でまた活路が開け、元気になると思うのですが。
- コロナに翻弄された看護師たちというテーマに関心があり、参加しましたが、過去形で話されることが、現場との乖離を実感して違和感を覚えました。コロナは5類になり、社会は変化していますが、医療現場はまだまだコロナと共存する道を模索しているところです。この3年間でいろんな時期を乗り越え、感染対策も変化していますが、終わってはいません。新たな時期に突入したとも思えません。今はコロナで亡くなる患者さんは減少していますが、高齢者などは肺膿瘍、肺化膿症などで数か月後に呼吸状態悪化で再入院となって、それが命にかかわる事態を招いていることも少なくありません。これまでの感染対策は、感染症の患者さんから看護師自身の身を守り、広げないことでしたが、コロナは入院時にPCR検査を実施して院内に持ち込まないことを徹底しているため、私たち医療者が患者さんに移さないための感染対策が今後もずっと必要だと感じています。ただこの3年間の経験で学んだことはたくさんあります。愚痴や課題、問題ではなく、今後活かせる学びをまとめていただきたいと感じました。
- 現場の生の声を記録に残すことはとても重要だと思いました。教育の現場からの声も是非加えていただければと思います。
- 在宅看護や精神看護は日頃接しない領域なので、あらためてパンデミックという災害が発生した際の問題点など、現場の声として知ることができ、とても良かったです
- 看護師が働くコロナ禍での現場の看護師の様子が分かり、知りえないところでの看護職の苦悩が見えて参加してよかったと思った。

- 感染下で起きている現状は、制度であったり仕組みであったり様々であった。
- 自分の職場に置き換えると、感染ばかりに目が向いていたが、サポートに入ってきてくれた職員への説明や、気持ちを確認する仕組みは、低かったと思う。職員のコロナに向きあう気持ちを維持していくためには、コミュニケーションがとても大事と思った。
- コロナ禍で看護師はひどい状況に置かれていたとは思っていたが、わけのわからない権力が動いていたことが見えた。看護師がなぜ抵抗できないのかもどかしい
- グループディスカッションは最初緊張していたのですが、もっともっと話し合いたいと思い時間が短く感じました、貴重な機会をいただきありがとうございました。「現場から学んだこと」とおっしゃっていただき、そのような実感もなく現場では働いていましたので、そのように言語化し、丁寧に意味づけしていくことが本当に大切なのだなと思いました。
- グループディスカッションが難しかったです。”精神看護””コロナ病棟”での体験をしていない人が集まっていますが、何を話そうとしているのか、目的がわからず、意見出しづらかったです。
- 今回の勉強会に限ってではないのですが「看護」について多面的に熟考できるテーマで開催いただくことで、自分の視野の狭さを自覚すると共に、普段、ご著書でしかお会いできない先生方のご意見を直接伺えて、大変貴重な機会だと思っております。
- 毎回とても有意義です。未来塾で討議されたことがもっと広げられたら良いなと感じました。
- コロナで体験したこと：日本中国民が恐怖となり、第1波、2波などは罹患したら村八分状態となった。失業者が増えた。医療用消耗品が間に合わずマスク、ガウンなど手作りした。病院・施設での施設での清潔援助が減った。看護学生が実習時数が極端に減った、またずっと学生の実習も受け入れた病院もあり差が生じた、面会制限もあり、家族等が患者に合えなかった、家族も看護師に十分説明も貰えなかった、コロナ受け入れ病棟を作ったため、一般病棟の方に業務負担が増し、看護師の間で不満が生じた。コロナ病棟は手当あり、一般病棟は無いと言うことで。コロナが流行し病室の掃除からすべてを看護師に求められた。看護職のストレスが増大した。離職者が増えた。マスク社会になり、病院で内学校でも5類相当になっても全員授業中もマスクで表情が読み取れない、未だに外でも、スーパーでもマスク着用が多い、コロナが増え、病院も看護師も罹患者が増え、ますます診療補助業務優先となりコロナ罹患の時の生活指導が十分なされていなかった。

Q. セッションや全体的な日程について他にコメントがございましたらご記入ください。

- 日曜日の午後は、病棟ナースにとっては、とりやすい。

以上